

2023年2月19日 降誕節第9主日礼拝

メッセージ「これだけしか／こんなにも」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 9章 10-17節

今回の聖書のお話は、いわゆる「5つのパンと2匹の魚」のお話でした。食べた人の人数に4000人や5000人という違いがあったり、場所が少しずつ異なっていたりはしますが、このような内容のお話は4つの福音書に合計6回も記されています(5000人:マタイ14:31-21、マルコ6:32-44、ルカ9:10-17、ヨハネ6:1-13、4000人:マタイ15:32-39、マルコ8:1-10)。そのことから、このような大勢の人々との「共食」の出来事が、約2000年前のパレスチナ地方を歩まれたイエス様の生涯において、とても重要なものとして、当時の人々に受け止められ、理解されていたということが分かります。

このお話には、聖書協会共同訳聖書では「5000人に食べ物を与える」という小見出しが付けられています。他の翻訳では「パンを増やす」という小見出しが付けられている聖書(フランシスコ会訳)もあります。とはいえ、一体どうやって裂いたパンが増えたのか、たった5つのパンと2匹の魚をどうやって5000人が食べたのか。そのようなことを考えれば考えるほど、このお話は想像してみることが難しい不思議なお話です。ですが、今日はこの「パンと魚を分ける」お話を実際にあつた出来事として、というよりも、イエス様が人々にたくさんの「たとえ話」をされたように、一つの「たとえ話」のように違った角度から読んでみたいと思います。

4つの福音書によって、少しずつ描かれている情景が異なりますが、今回の「ルカによる福音書」では、場面はベトサイダという町の近くだと書かれています(ルカ9:10)。「ベトサイダ」というのは「漁師の家」という意味です。場所もガリラヤ湖の湖畔にある町でしたから、そこではその名の通り古くから漁業が盛んだったのでしょう。イエス様に従った漁師たち、ペトロとアンデレ、フィリポの出身の町でもありました(ヨハネ1:44、12:21)。そして、その町の近くで大勢の人々がイエス様の所に来て、神の国についての話に耳を傾け、また癒しを受けていました(ルカ9:11)。しかし、そうこうしている間に、日が傾きかけてきたので、12人の弟子たちはその後のことが心配になり、イエス様の所に来て言いました。「群衆を解散し、周りの村や里に行き、宿をとり、食料を調達するようにさせてください。私たちはこんな寂しい所にいるのです」(12)。しかし、イエス様は言われました。「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」。彼らはびっくりして言い返します。「私たちに、パン五つと魚二匹しかありません。まさか、私たちが、この民みんなのために食べ物を買に行けとでもいうのでしょうか」(13)。目の前には5000人というとても多い数の人々がいます。もちろん、実際には1000人だったかもしれませんし、500人だったかもしれませんし、100人、50人だったかもしれません。人々の口から口へと語り継がれている内に、どんどん大げさになっていったのだろうと想像することは出来ますが、何はともあれ、5つのパンと2匹の魚、つまり自分たちが持っているものでは、到底対応できないような、どこか他所に買いに行くにして

も、現実的ではないような、そんな人数であり状況であったのだと思われます。

それにもかかわらず、イエス様はというと、それこそ「お手上げ」してしまっている弟子たちを他所に、淡々と「人々をおよそ五十人ずつひとまとまりにして座らせなさい」と言い(14)、続けて五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それを祝福して裂き、弟子たちに渡しては群衆に配らせました(16)。そして、人々はその配られたパンと魚を食べて、満腹しました。更にその上で、余ったパン切れを集めると、十二籠もありました(17)。ここで言われている「籠」は、畑仕事などに用いる「背負い籠」(コフィノス)のことですから、かなりの大きさです。そして「12」とは、古代イスラエル民族の全部族を象徴している数字ですから、17 節の言葉は、実際の数量というよりは、「全ての人々が満ち足りて、なおかつあり余った」ということを意味しているのだと考えられます。それにしても、5 つのパンと 2 匹の魚がそんなにも増えるでしょうか。5000 人ほどの人に配るために、イエス様はパンと魚を「千切り」にしたのか、「みじん切り」にしたのか、またそこからどうやって「余ったパン切れ」「パンくず」が出てきたのか、など具体的なことを考えることには、あまり意味はなさそうです。

むしろ、この一連のお話の中で、注目したいのは、「お腹を空かせた大勢の群衆」という目の前にある課題、現状に対する弟子たちとイエス様との向き合い方の違いです。弟子たちは「困りました。先生どうしましょう」とイエス様に相談し、「私たちはこんな寂しいところにいる、何もできることはありません。ですので、いったん解散させて、各々で食料を調達させましょう」と言いました。しかし、イエス様は「あなた方の手で、食べ物をあげなさい」と答えられました。イエス様は、弟子たちが5000人分の食料を持っているとでも思っていたのでしょうか。もちろん、そんなはずはありません。5つのパンと2匹の魚しかないくらいに、何も持っていないということを知っていましたし、5000人分の食料を買ってくるだけのお金もないことも、もちろん知っていたはずですが、それにもかかわらず、なぜ「あなた方の手で、食べ物をあげなさい」と言われたのでしょうか。あらかじめ「出来ない」と分かりきっていることを意地悪く命じられたのでしょうか。そんなことはないはずです。実際、お話では結局の所、イエス様が5つのパンと2匹の魚を取り、祝福し、裂き、それを弟子たちが配ることによって、人々に食べさせました。ですが、これは果たして弟子たちの手によって食べ物をあげたことになるのでしょうか。それともイエス様が与えたことになるのでしょうか。どうでしょうか。

このお話の背景には、もう一つの物語がありそうです。それは古代イスラエルの人々がみんな知っている「出エジプト」の物語でした。イエス様が生まれるよりも1000年以上も前に、古代イスラエルの民は、エジプトの国で、奴隷として様々な苦役に課せられていました。そんな民たちが、指導者モーセに率いられてエジプトを脱出するわけですが、その際、エジプトから持ってきた食料はすぐに尽きてしまい、荒れ野の中で食べ物がなくなるという危機に直面します。しかし、命の神ヤハウェは、人々に天からのパン(食糧)として、朝毎に地上に「マナ」を降らせて、人々

はその「マナ」を食べて、荒野の旅を続けることが出来たという物語です（出エジプト記 16 章）。また 5000 人ほどの人々を、わざわざ弟子たちの手間と時間をかけて「50 人ずつ」のグループに座らせたという描写も、モーセが民を 10 人、50 人などの人数でグループ分けしたことを連想させます（出エジプト 18 章）。

弟子たちが、イエス様に対して「先生、どうしましょうか」と言った時、彼らはもしかすると、モーセのように「天からマナを降らせてくださるかもしれない」と思っていたかもしれませんが、イエス様が荒野で悪魔から誘惑、試みを受けられた時のように、目の前にある数々の「石をパンに変える」こと（ルカ 4:3 並行）を期待していたかもしれませんが、しかし、イエス様の行った奇跡は、そのような特別な奇跡ではありませんでした。イエス様は、5 つのパンと 2 匹の魚を受け取り、祝福し、裂き、それを弟子たちが配りました。それは私たちの「命の糧」である食事は、たとえわずかなものであっても、自分たちの所有物ではなく、「天の神様から与えられたもの」であること、だからこそ「感謝して、祝福して、隣の人と共に分かち合うもの」だということを意味しているのではないかと思います。

次に、そもそも「パンと魚」は何を意味しているか、という疑問が出てきます。確かに「パン」は地中海世界の人たちの主食、日常の糧として、食事全般の代表であるということが出来ます。お米を主食としている私たちが「ご飯」という言葉で、おかずも汁物も含めた食事全般を表すように、地中海世界の人々にとっての「パン」とは、食事全般を意味する言葉でした。では、もう一つの「魚」とは何なのでしょう。ガリラヤ湖のあるガリラヤ地方の人々にとっては「魚」も「パン」と同様に、日常の糧だったと言うことでしょうか。それにしても、それこそ「目刺し」や「開き」のような「干し魚」を手で裂くというのは、パンを裂くよりもずっと大変そうです。どうでしょうか。イエス様と弟子たちや人々が暮らしていた時代、ユダヤの国はローマ帝国に支配され植民地とされていました。大多数の人々は重たい重税に苦しみ、収穫物の大半を持っていかれるどころか、先祖伝来の土地を奪われて、日雇い労働者や小作農になる人々も多かったです。湖畔の人々に恵みをもたらしていたガリラヤ湖も、ローマ皇帝の名前にちなんで「ティベリアス湖」とも呼ばれるようになり、そこで獲れる魚は、次々と国外に輸出されていきました。ですから、漁師たちも丘の上の農夫たちと同様に、借金のかたに網を失い、船を失い、仲買人に買い叩かれる暮らしでした。つまり、大地や湖から獲れるパンも魚も、そこに暮らし働いている自分たちの手から次々に奪い取られて行っていた時代であったわけです。

そのような時代背景の中で、イエス様は人々に対して、手元にあったパンと魚を分けました。それは大地も湖も、そこから生み出される産物も、すべてはローマ皇帝やユダヤの領主という権力者たちの所有物ではない。「ヘブライ語聖書」にあるように、「土地は私（神）のものであり、あなたがたは私（神）のもとにいる寄留者か滞在者にすぎない」（レビ 25:23）のであり、「地とそこに満ちるもの／世界とそこに住むものは主のもの」（詩 24:1）である、ということを改めて主張する行為でもあったと考えられます。だからこそ、イエス様は人々とパンと魚を分け合うこ

とを通して、権力者たちに一方的に搾取され続け、諦め続けるだけの生き方ではなく、パンも魚も、神様から与えられた恵みを自分たちの手に取り戻す生き方。自分たちの手の中に、たとえわずかになってしまっているとしても、確かに恵みは与えられているということに目を向ける生き方へと、人々を促したのではないのでしょうか。

空腹の 5000 人を前にして、「人々を解散させてください。各自、自己責任で食事を調達させましょう」という弟子たちに対して、イエス様は一斉に天からマナを降らせたり、石をパンに変えたりして対応したのではなく、「あなたがたの手で食べ物をあげなさい」と弟子たちに言い、その後、5 つのパンと 2 匹の魚を分けられました。それは弟子たちにも、「それが出来る」ということ、私たち一人ひとりにも「同じようにすることが出来る」ということを示すためだったのではないのでしょうか。たとえ、一人一人が持っているものは、人前に出すのが恥ずかしいと思われるくらいに僅かなもの、全く役に立たないとしか思えないようなものであったとしても、それらは神様からの恵みとして、確かに与えられている物であり、それらは隠してしまうのではなく、周りの人たちと分かち合おうとする時、神様はそれを豊かに用いて必要十分なものにして下さるということなのではないかと思います。

トルコ南部・シリアで今月 6 日に発生した大地震では、発生から 10 日以上が経ちました。日に日に被災者数は増え続け、今では 4 万 6000 人以上の方々が亡くなったとのことでした。救援物資も何もかもが不足している中、困り果てている現地の人々の様子が、日々に報じられています。また今度の 24 日で、昨年ロシアがウクライナに軍事侵攻を始めてから丸 1 年となります。両軍ともに正確な戦死者数は発表されていませんが、おそらく 20 万人以上の人々が殺されたようです。戦争は人災ですから、地震などの自然災害と並べることは出来ませんが、そこに、今この時に苦しんでおられる人がいるということは同じでしょう。そのような現実の中で、私たちにできることは何なのか。何もできないのか。どうしたらいいのか。様々なことを考えます。

私たちの教会が数年前から応援している神戸国際支援機構の方々、内戦の続いているシリアには数年前から支援に行っているそうですし、また早速ウクライナにも行かれたそうです。私たちにできることは、献金をお送りすることくらいですが、それら小さな思いが集められて現地で被災されているの方々に対して豊かに用いられますようにと祈ります。

自分が持っている物、自分に出来ることは「これだけしかない」と思うか、「こんなにもある」と思うかは、本当に心持ち次第、なのでしょう。「こんなにもある」と思っている、実際にはそんなに成果を上げられないことも沢山あります。それでも、世界に正義と平和が実現するように、各自が持っているものを隠してしまうのではなく、与えて下さっている命の神に感謝して、隣の人たちと共に分かち合い、生かし合っていくこと。そこに、それを必要十分なものとして生かして用いて下さる神様の奇跡があるのではないかと思います。共にいて下さる神様に支えられながら、私たちは今日もここから小さな一歩を歩みだしていきます。